

Title	スマトラみやげ
Author(s)	
Citation	星 (1929), 1: 16-20
Issue Date	1929-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/168975">http://hdl.handle.net/2433/168975</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## スマトラみやげ

去る十二月一日の夕暮れ、突然、電話の先きぶれで、スマトラからの珍客乾氏が花山へ來られた。そこで、客を圍みつつ、半年前の<sup>なま</sup>生々しい記憶を呼び起して、暑かつた南洋の、あの日食の、愉快と心配とで、眞にハラハラさせられた日の事を語り合つた。乾氏は、日食の日の思ひ出多い寫眞を、幾十枚も持つて來て下さつたものだから、奪ひ合ふやうに打ち眺めつつ、笑ひ、且つ話す。



日食の日（五月九日）の正午観測服のまゝ  
一同が辨堂を食べてゐるところ

日食観測點には、朝早くから身仕度を整へて、日本から渡つて來た六人、エステートの人々六人、總計十二人、甲斐甲斐しく働く。連日來の雨雲が大體たち退いたことは言へ、高い空には未だ卷雲の往來が絶えない。青い天が、現はれたかと思へば、すぐ又白雲に掩はれやうとし、宛かも、

頭上の氣流の中に、「晴れ」と「曇り」が戦ひつゝけてゐる。



皆既食後の喜び

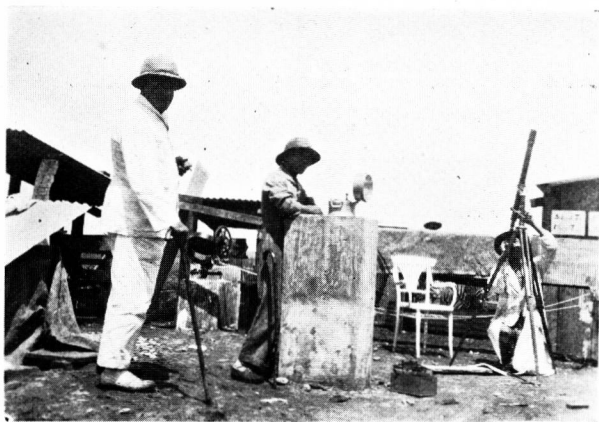


日章旗の下に集つて

十時過ぎ、一時「晴れ」が勝つらしく見えたので、皆々喜び勇む中村君はまづヒルガーの直視分光器で此の日のプロミネンスを探る。『太陽の西側に可なり大きいのが見えます!』の報告で、一同は緊張する。

十一時過ぎの初觸の頃はほぼ70點の晴天。皆が大小のコロナグラフと二臺の望遠鏡に集まつて、まづ黒な月の「御化け」姿の出現を見守る。時計係りが、最も大切な皆既食の時の、好い御稽古のつもりで、威勢よく時計の毎秒を数へる。――

第一觸の觀測は、絶好の日和に恵まれつゝ、首尾よく終つた。すぐ其れから皆はベンチの所に集まつて御辨當を開く。サンドキチあり、御むすびあり、ハムあり、御香々あり、梅干しあり、コーヒーあり、御茶あり、――それに、御すしありこいふわけで、何こも言ひ様のない愉快的、親しみの、思ひ出の深い御晝御飯であつた。手に御箸を持つたのも誠に久しぶりであつた。



Van Ditmars 濱口

中村

この楽しい御晝御飯の頃から、生や憎く、空には又々雲がはびこつて来て、戦ひが始まつた。今や空には二重の戦ひが行はれてゐる。一は「太陽」と「月」の戦ひ、他は「晴れ」と「曇り」の戦ひである。吾々下界に居る者の心を言へば、第一の戦ひには、「月」を勝たせたく、第二の戦ひには「雲」を負けさせたく――ひたすら心に祈り、口に訴へてゐるのであるが、中々、自然は人の思ひのまゝにならない。時々經つと共に、形勢益々非にして、雲が殆んど全く勝利を得たかと思はれた其のまゝ皆既日食とな

つて了つた。『萬事休す』ミ皆の人は思つたであらう。『曇つても、豫定の通りやるべし!!』ミいふ號令の聞えた時、『こんなひざい曇りの時に、豫定のプログラムなぞ、やつたつて何になるものか!』ミいふ心があつたかも知れない。

ミにかくやつた。しやにむににやつた。——やつてゐるうちに、盗むやうにして天を仰ぐミ、太陽附近は何だか淡す明るくて、一種の銀光が、流れる雲の間から見えてゐる氣がするが、しかし其れば單に氣のせいかな?『あの雲の奥にこそ美しいコロナの輝きがあるのだろうが!!』なぞミ思つてゐるうちに、既に五分時間は過ぎて、皆既食は終つた。

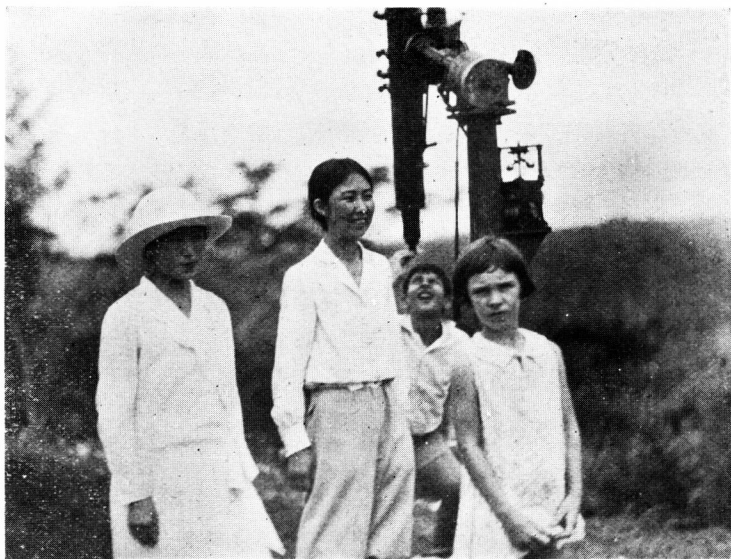
山本氏が此の時のコロナを5センチ機で見たのは實に僥倖であつた。此の僥倖によつて、皆既中に淡白く見えたあの銀光は全くコロナ其のものであり、雲は此の五分の間に可なり薄らいだのであることが確かめられたのであつた。ミ知れるや否や、『萬歳』の聲は期せずして擧げられた。

此の萬歳の聲を聞いて、ブキト（小山）の下に居た支配人一家や御客の人々が一齊にブキトに馳け登つて來られ、犬も猫も、誰もかも悉くやつて來て、『御目出たう』を言ひ合つた。



山本夫人の食事

乾氏を花山で迎えたのは山本中村兩氏であつたが、東一條では、山本夫人ミ上島氏ミ稻葉氏ミ三人が乾氏を迎え、この方は可なり夜おそくまで、「あの日」の事を話し合つた。何ミ言つても、一生に一度の、しかも悩みぬいたあの日の記憶を、まだ半年しか経たない今話すのであるし、<sup>な</sup>生ま生ましい寫眞を眼の前に置いてであるから、誠に面白かつた。



カール君の盗み見

スマトラの野村氏エステートの支配人 Van Ditmars 氏に三人の子供がある。長子は Carl, 次子は Malines, 末は Susie 嬢である。何れも日食の珍らしさを充分味はつただろうと思はれるが、Carl 君は日食直後、分別顔に、『明日も亦日食があるのか?』ミ、聞いてまわつたのは御愛興であつた。

蝕が終つて後、米獨の兩觀測隊のゐるタケンゴンや、オランダ隊のゐるイデイの天氣は如何であつただろうかミ、こちらに多少の餘裕が出来て來るミ、こんどはよその事が氣にかゝつて來た。明日になれば新聞で知れるこゝは思つたが、其の「明日」が待たれなくて、Van Ditmars 氏は電話をかけてくれた。其の返事が、タケンゴンからは“EXCELLENT”といふのであつたけれど、イデイからは ENTIRELY CLOUDED であつたこゝは、實に言ひやうも無く氣の毒であつた。